

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

すもう、けんか、木のぼり、石けり、小学生をかしらにしてのこわっぱたちの遊びは、放胆で、原始的で、山深い谷間の急流が落下するようにそうぞうしくて、すがすがしい。

ノボルはめったにその仲間にはいれない。それはいつも彼の小さい背中に妹のリカがゆわいつけられているためだ。姉のタズが帰ってくるまでは、一時間おき位に何度かゆわいつけられ、おとなしく、時には少しむずかたりしてリカの顔が、小さい肩に白くのっかっている。その間見向きもせず、畑仕事にうちこんでいる親たちの険しい圈内にははいて来ない。夏近い太陽が中天にのぼると、梨畑の暗い葉かげの下へ、はだしではいてゆく。課せられた自分の責務を果たそうつもりか、小さく小さくもぐるように遠ざかってゆく。そしてそんな時、きまって同じ一つのうたを遠くでうたう。たぶんタズからきき覚えたものであろう。

問一
ぎんぎんぎらぎらゆうひがしずむ

ぎんぎんぎらぎらひがしずむ

まっかつかつかそらのくも

問二
あのうただ。いく度もいく度も同じうたをあきずにくり返す。うまい。子どもらしい音程にもくらないがない。

その歌声を耳にすると、私はいつもノボルの心は西空の「湯ノ岳」の山嶺をながめているなど想像する。小さいからだに重すぎるリカと重なった影ぼうしが、山畑の上にひきずるような長い尾を引いている夕げしきを思いえがく。彼の目の中には、口にはいえぬ二つぶの水玉が、まるくまっかつかにきらめいているのではないかと続

問三
けて思う。とりも直さず重いカセを解き放される自由の日暮れを待ちわびているのかもしれない。たまたまなくて、私は畑にすわって乳房を出しながら大声で呼びたてる。リカが暑さにげんがりして膝の上で乳房にすがると、彼は脱兎のようにわがやの方へにげてゆく。

私たちはいまだかつて子どものために、おもちゃといえるようなものを買ってあたえたことがない。ともあれ余ゆうがないのだ。だれかにももらったぼろぼろの絵本、つぶれたセルロイド人形、空気のぬけたゴムまり、パイという単調な鳴音がこわれて出なくなった山鳩などは、もう彼らには何の魅力もなくどこかへつこまれてしまった。三月の雛人形もなく、五月の鯉のぼりもない。だれに祝福されるでもなくこの世に生まれたような彼ら。しかしそんなことはこうした開拓部落に住んで、人界の風習にうとい子どもたちには、一方にこの親たちの親らしい力を持たぬ親であることなど、あまりさしきわりにはならないようだ。

問五 根元からはなれた場所にまかれた肥料に、根は生きるためのびん感な触手をのばす。成長する意志は、そのおかれた場所からふさわしい何らかの必要な活動を見事にふみ出すらしい。

白つめ草がさけば、タズは学校帰りの川原でいくつもの花輪をつくり、まだ固まらないリカの小さいくびにまでかざってやる。梨畑の下につみ果たして散らした青い小さい実を手当たり次第拾い集めては、土の上に一つ一つを並べて、正しい円形、だ円、四角、三角をえがき出す。ひし形、六角形までも。一つの実のぬき差しによって、より正確な図形を整える。幼い知恵によって工夫体得する幾何の芽生えだ。

こんな時はタズの方がやや複雑に、家になり人になり花になり多様化する。ノボルの単一な形の創意よりも、タズには年齢に応じた鑑識の前進があるためだろうか。

タズが四つの時、父のうしろについて日暮れの畑道で無心にいった。

何にもねえから、花煮てくうべな。

おてんとうさまあっち行った――

畑にはとり残したふらふら菜っぱに、真黄な花がしんじつにさいていた。父親は立ち止まってそれをそのままノートに書きつけた。その晩、ほんとに何もなかった私たちは菜の花を煮て、新しい食味で胃ぶくろをみたしたので

ある。とぼしさをなげくだけの大人の常識に墮したよどみを、そのときこのばかな母親は、どんなにわびしく、あえなくはじたか知れない。

親ばかりの情熱は、ある時はまたムキな執念で、わが子のどこかに人に知られぬ高い評価の点数をつけたがる。ノボルのつくる竹トンボ、これが至極すばらしい。両翼のつりあいと中心のひねりの均こうがうまくとれてるらしく、だれのよりも高く長くとぶ。鉄輪をはめたコマのあの快いうなりと、みな澄んだという回転最中の不動に見える一刻の魅力にみとれて、ノボルは例のはな汁をたらずが、買ってほしいといい出す言葉を持ちはしない。

問六 自分の手で堅木のいくつかをこしらえた。鉄輪も心棒もないのっぺらぼうのひよろ長い、みんながバカゴマと軽べつするそれを。四つも五つも。表面のでこぼこを小刀でなめすようにけずりとして、中心の心棒の位置をカン

で決める。梨ぶくろの補強に使う荏油が空かんにこびりついているのをぼろ切れでぬぐいとして、コマ全体に根気よくみがきかける。白木の手あかがかくれて油じみたつやを持つと、ぐんと格が上がってほんものらしいおもちゃに見えてくる。そんなとき、私はどうしても細くしなやかなひもをつくってやりたくなった。 unnecessary 古

いもみうらをさいて、念入りに平均によりを加えて先細りにもじる。鉄輪のコマにはあさひもだが、手づくりの

バカゴマには布よりの絹ひもがふさわしいようだ。彼は喜んで紅ひもをきりきりと巻きつけ、小さく腰をかまえ、右手をくるくる回転させながらさっと投げて紅ひもを引く。コマははじめはたおれるように大ゆれにおどきまわが、少しずつ小まわりに変じて、見ている者をはらはさせながら、極めてひょうきにまるで全身で笑っているよう、澄むなどという荘重なものしさとはうらはらにふらふら、ゆらゆら、たおれそうでなかなかゆ快に意気張ってるみたい。ころりと音して細長いからだを横たえた時、ノボルはしょんぼりとしたが、私はばかりのように笑いこけた。

土台おもちゃは楽しいものでなければならぬはずだから。大量生産されたものには、整った造形の美、研究

された運動の統一した安定があるだろうが、この幼い子の手から生まれたものには、無からはじめた粗野があり、危なっかしい不完全があっても、確かな個性がともなう。おそらく五つが五つ、みんなちがったそれぞれのおどりをひそみ持ち、展開してみせるだろう。

「うまくできたな。クレヨンで色ぬったらどうや」

私は心からほめたつもりだが、彼はむっつりとして考えこんでいる。しかしもう次の工夫が小さい脳みその中をむずむず動いているらしい。

(中略)

いく日か過ぎて、ノボルは重たい口で私に二銭のかねをせがんだ。まゆ根をよせた母の顔に半ば絶望の上目をつかいながらヨーヨーを買いたいという。いっせいにはやり出したもので、私は手につかんだことはないが、滑車の回転の振動と情性を利用した、まんじゅうを二つ合わせたような形のもので、芯に結んで垂らした系の操作で生きてるような高さまですると上下する。たわいない大人まで夢中にならせた。

初めてねだったらしい希望であった。だが私はこんな場合にさえ、夢をくだいた日ごろの生活からわく打算を忘れぬ非情さを持つ。二銭の価値は、キャベツ一個、大きなあめ玉十個、ナス二十個、小さいなら十五匹は買える額とはじき出す。それならちびた鉛筆で書きなやんでいるタズに新しい長いのを買ってあたえられる。私はカボチャの煮たのを食べさせながら、できるだけおだやかにいった。

「ヨーヨーなんてつまんねえぞう。じっきはやんなくなっちゃあよ。それよりもなあノボル、梨ができたら、ほら来年学校さあがんだっぺ。帽子と、カバンと、いろんな本、すずり、筆、鉛筆、ナイフ、それから石盤石筆、帳面、クレヨン、そして新しい下駄なんど！ うんとかかっけどみんな買ってやるよ。学校さ上がと、運動会の帽子だの、白いさるまただの――」

問十

ノボルのまつ毛は、ばしばしと絶えずしばたいたいたが、きいているのかいないのか、だまってカボチャを食い終わると、すっと戸外へ出て行った。

(中略)

コマひもの二銭、ヨーヨーの二銭、が妙に胸にひっかかって、ただ貧乏と戦うだけの心の寒々しさがうすぎたなく、後悔が先だって何もかもあわれに思えて来た。午後は歌声も姿も見えないノボルが気になって、タズの背にリカをゆわいてからも、仕事の手がいつもよりたると見え、つかれたんだらやすめと何も知らない父親はいつてくれたが、私は頭をふって、陸稲に土寄せする鋏の柄をますます強くにぎりしめてふりつづけた。

しかしその夜、つりランプのともるうす暗い小家の中は、めずらしく親子入り交じった歓声が奇態にわき起こった。見事、ノボルがヨーヨーをつくりあげたからであった。古い傷口がゆ着して上下の樹皮がぼつりと、内部の木質を包んでまるくもり上がった得難い小松の中枝がその材料であった。枝の上下を引き切り、都合よくゆ着の線がくびれている中央にぐるり深くみぞをほりこみ、からんだ糸はたこ糸を切って例のあぶらぼろでみがついてすべりをよくした入念な仕上げだ。やや円筒に近く、売り物の形とはちがうが、くるわめ均こうのカンに振動のほうけは見られない。せまい小家の中から、満月の青くかがやく戸外にとび出したノボルは、得意げに右手を次第に大きく反動させて、どうやらびゅんびゅんと、光の中で球は上下をしはじめた。それは軽妙な奇術まがいの遊びというより、厳しゅうな精魂のおそろしいおどりであった。

(吉野せい『涙をたらした神』)

〈注1〉裏地に用いる紅色の絹布

〈注2〉「銭」はお金の単位

問一

——部「課せられた自分の責務を果たそうつもりか、小さく小さくもぐるように遠ざかってゆく」とありますが、「私」はこのときの「ノボル」をどのように見えていますか。

- 1 殺気だって仕事をしている親たちの凶悪な様子を目の当たりにしてほとほといや気がさし、妹の子守をして気分を変えようとしている
- 2 生きるために必死で働いている親たちに遠慮しつっじゃまをしないように日かげに入って、自分に任せられた妹の子守をしようとしている
- 3 妹のことも子守をしている自分のことも忘れるほど畑仕事にうちこむ親たちを見ていると、見捨てられたように思われて悲しくなっている
- 4 一心不乱に働く親たちの姿に近寄りがたい気配を感じ、子守しかできない自分がはずかしくなっていく自然に足が遠のいていっている

問二

——部「いく度もいく度も同じうたをあきずにくり返す」とありますが、「私」は「ノボル」が同じうたをいく度も歌うことをどのようにとらえていますか。

- 1 姉から教えてもらったうたをうまく歌えるように練習している
- 2 元気よくリズムカルに歌うことで妹をあやそうとしている
- 3 妹の子守から解放される日ぼつをひたすら待ち望んでいる
- 4 泣きやまない妹に感じるいらだちを無理に忘れようとしている

問三

——部「彼の目の中には、口にはいえぬ二つぶの水玉が、まるくまっかかにきらめいているのではないか」とありますが、「私」はこのときの「ノボル」をどのように見えていますか。

- 1 遊びたいさかりに遊べないのはつらいが、生活のため親の手伝いをしなければならないことをよく理解し、自分の役割をだまって引き受けてたえている
- 2 他の子どもたちといっしょに自由に遊べないばかりか、親に気をつかいがまんを強いられていることに、やり場のないいかりを覚えている
- 3 たわいなく遊んでいる他の子どもたちよりも、両親の言いつけを守って家の手伝いをしている自分の方がりっぱで尊い人間だと、ほこりに思っている
- 4 何度も歌い続けることで、きちんと言いつけを守って子守をしていることを両親に知ってもらい、自分を認めてもらいたいと考えている

問四

——部「親らしい力を持たぬ親である」とはわかりやすくいうとどういうことですか。

問五 ——部「根元からはなれた場所にまかれた肥料に、根は生きるためのびん感な触手をのぼす」とありますが、これを「子どもたち」に当てはめるとどのような行動と一致しますか。文章中から一例を挙げて簡単に書きなさい。

問六

——部「自分の手で堅木のいくつかをこしらえた。鉄輪も心棒もないのっぺらぼうのひよろ長い、みんながバカゴマと軽べつするそれを。四つも五つも」の部分に表れている「私」の説明としてふさわしいものに○、そうでないものに×を書きなさい。

- | | | |
|--------------|-----------|-------------|
| 1 感謝している | 2 興奮している | 3 あわれんでいる |
| 4 ほこらしく思っている | 5 おどろいている | 6 情けなく思っている |

問七

——部「私はどうしても細くしなやかなひもをつくってやりたくなった」とありますが、このときの「私」の気持としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 ノボルのつくったコマは確かにりっぱだが、最後はやはり大人が手を貸してこそはじめて本物として完成するのだという気持。
- 2 コマを買ってやることはできないが、いつも親の言うことをきくノボルにごほうびとしてせめてひもでもつくってやろうという気持
- 3 ふだんはいそがしくノボルをかまっていられないが、コマをきっかけに子への愛情を示し何としても親子のきよりを縮めたいという気持
- 4 ほんもののような見事なコマをつくり上げたノボルのいちずさに心を動かされ、何としてもよいものにしてやりたいという気持

問八

——部「私はほかのように笑いこけた」とありますが、このときの「私」の気持としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 ゆれるバカゴマといっしょに笑うことでわが子を元気づけてやりたいと思う、母親らしい気持
- 2 ノボルがおもちゃの本来持つべき楽しさを見事に引き出したことに満足し、晴れ晴れとした気持
- 3 貧しくてノボルにおもちゃの一つも買ってやれない自分の情けなさを、笑いとばそうとする気持
- 4 やはりおもちゃは手づくりが最良だという自分の考えが正しいとわかって、ゆ快な気持

問九

——部「だが私はこんな場合にさえ、夢をくだいた日ごろの生活からわく打算を忘れぬ非情さを持つ」について答えなさい。

①「だが私はこんな場合にさえ」には「私」のどのような思いが表れていますか。

- 1 生活が苦しくておもちゃなど買える余ゆうがないとわかっているノボルが急にわがままを言ったので、とまどう思い
- 2 おとなしいノボルが親の顔色をうかがいながらねだったので、幼い子どもにお金の心配をさせてすまないという思い
- 3 ふだんものをねだることなどないノボルがめずらしくねだったので、本当ならその願いをかなえてやりたいという思い
- 4 いつも子守ばかりして友だちと遊ばないノボルが最新のおもちゃを欲しがったので、子どもらしく感じうれしい思い

②「夢をくだいた日ごろの生活からわく打算を忘れぬ非情さを持つ」とはどういうことですか。

- 1 楽しみは一時的なものだから、何事も感情に流されず常に計画的に行うということ
- 2 おもちゃがなくても子は育つものだから、厳しくしつけをするということ
- 3 たとえゆとりのない生活がみじめでも、決してひくつな表情は見せないということ
- 4 何よりも生活費を最優先して判断し、生活に不要なものは切り捨てるということ

問十

——部「ノボルのまつ毛は、ぱしぱしと絶えずしばたいていたが、きいているのかいないのか、だまっ
てカボチャを食い終わると、すっと戸外へ出て行った」とありますが、このときの「ノボル」の説明とし
てふさわしいものを選びなさい。

1 ヨーヨーの代わりに何でも買ってやるという母のうそに気づいたノボルは悲しくなったが、なみだを見
せまいと出て行った

2 ヨーヨーを買ってもらえないとわかったノボルは、どうしたらよいかをひとしきり考えたあと、ヨー
ヨーをつくりに出て行った

3 ノボルはヨーヨーなどつまらないという母の話にうんざりしたが、カボチャを食べ終わるまではがまん
をし、食べ終わったので出て行った

4 ノボルはヨーヨーを買ってもらえないことをむりやり自分に納得させようとしたが、いらだちをおさえ
きれなくなって出て行った

問十一

——部「後悔」とは具体的にどのようなことに対する「後悔」ですか。

問十二

——部「私は頭をふって、陸稲に土寄せする鍬の柄をますます強くにぎりしめてふりつづけた」とき
の「私」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 ヨーヨーを買ってもらえなかったりしているであろうノボルをふびんに思う気持と、貧しさを理由に
買ってやらなかった自分の冷たさを、一生けん命に忘れようとしている

2 貧しい家庭に生まれたことを受け入れられないでいるノボルをかわいそうに思う気持と、どうしても貧
しさからぬけ出せないままの親でしかない情けなさを、まぎらわそうとしている

3 ヨーヨーを買ってやらない親に愛想をつかしているノボルにすまないという気持と、貧しさと戦うだけ

の生活に追われている自分の弱さを、ふりはらおうとしている

4 二銭のお金すら自由に使わせないことをなげいているであろうノボルに貧しい現実をわかってほしいと
いう気持と、子をぎせいにする親の身勝手さを、少しでも捨て去ろうとしている

問十三

——部「厳しゅうな精魂のおそろしいおどりであった」という部分には、「私」のどのような思いを
読み取ることができますか。

1 青白い月明かりの中で上下するヨーヨーがまるで死者のたましいのように見え、祖先をおそれうやまう
気持が生じている

2 ヨーヨーを買ってもらえなかったノボルのうらみやくやしさがヨーヨーにこめられているように見え、
そらおそろしさを感じている

3 おもちゃのひとつも買ってやれない貧しい生活の中で親子の交わりをもたらししたヨーヨーに、深く感謝
している

4 おもちゃの楽しさや美しさを完ぺきなまでに備えたノボルの気はくのこもったヨーヨーに、強い感動を
覚えている

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

世の中がすごいそぎすぎているように思う。たしかに京都から東京まで三時間たらずでいける新幹線は便利
だ。しかし、よくかんがえてみると、列車にのっている時間はへったようにみえるが、一日の実働時間はかえっ
て多くなった。

片道三時間たらずだから日がえりのスケジュールを組むことが多くなる。そうになると、むこうへいってからの

仕事は圧縮されるので、密度がたかくなって、気がはる。大いそぎであちこちまわって帰りの列車にのる。そうすると一日に列車にのっている時間は六時間ということになる。

以前の六時間の列車の旅は、停車ごとに、その地方の名物を買ったり、名産の弁当を求めたりする楽しみがあった。だが、新幹線には、そういう楽しみがない。のっている時間は短くなったが、退屈の程度は **ア** ふえた感じだ。

だが、おかしなもので新幹線が目まえにあるとなると、旧東海道線にはのる気がしない。世の中の人みんなスピード・アップしているのに自分がそれに歩調をあわせないと、とり残されるような気持ちになる。

新幹線にかぎらず、このとり残されてはこまるという気持ちが、私たち全部をせつかにしている。それが現代人の生活なのだから仕方がないと、あきらめがちだが、このことはもっと慎重にかんがえないといけないと思う。みんながせつかちになることで、私たちの生活が粗末なものになっていることが、**イ** 見おとされている。そうして、これをほうっておくと、私たちは人間として低級なものにおちていく心配がある。

たとえば、雑誌は以前は月に一回でていたのが、このごろは生活がスピード・アップして一週間ごとの週刊誌が雑誌を圧倒してしまった。しかし、毎週つくるとなると、一ヵ月のひまをかけてつくっていたものにくらべると、原稿に念の入れ方が足りなくなる。発行の間隔がみじかくなるほど、ニュース性をもたねばならなくなる。あまりのんきな話だと、週刊誌のくせに何だといわれやしないかという気がでてくる。だから、どうしても息のみじかい、深みのたりないものができてくる。週刊誌の原稿が全部そうだとはいわないが、子孫に残しておきたいと思うような文章は少ない。

そう毎週毎週大ニュースがあるわけでないから、こしらえたニュースものせねばならぬ。時どき新聞に謝罪広告などがでているのを見ると、そう思わないわけにはいかない。

毎週ださねばならぬ週刊誌でもそうなのだから、毎日ださねばならぬテレビやラジオになると、制作するほうはたいへんなことだと思う。全部が低俗番組だというのでないが、毎日の番組をみていると、投下された労力にふさわしい程度だと思ふようなが多い。

毎日、人を楽しませたり、笑わせたりしなければならぬのはたいへんな仕事だ。やっている友人たちにあつて聞くと、よくそんないそがしい生活をしているとおどろく。そういう人たちはみんな、他社におくれまいということだけしかかんがえていない。私たちの生活がスピード・アップしたというが、そんなものとけたがちがう。

これもまた劇の仕事をしている人にきいたのだが、以前は俳優になるためには、親からかんどうされて食うや食わずで稽古の何十年かをおくってやっと役をつけてもらえたのが、いまのテレビの俳優には、そういうタイプの人が少なくなったという。俳優の演技が、それだけ以前の水準からはずれる。俳優だけでなく劇作家も、以前の劇作家ほどの修業をしないで、かんたんに番組をつくる。

毎日、自分の家でドラマをただでみせてもらえるのは結構なことだが、そういうのばかりみていると本物がわからなくなってしまう。

私はこの話をきいて、人工着色のタラコのことを思いだした。私の近所に昔かたぎの魚屋さんがいて、このごろまっかに着色したタラコが気にくわないので、市場から自然のタラコを買ってきて店にならべた。ところが買ってきた奥さん連中は、こんなのじゃなくて、ほんとうのタラコはないのとたずねたそう。これがほんとうのタラコだといっても信用しないで、よその店にいったって、まっかな人工着色のタラコを買っていったという。

にせものばかりみていると本物がわからなくなるばかりではない。にせ物をつくるのに加えた有毒色素が知らぬまに体内に蓄積してからだをわるくする。

これとおなじようなことが、私たちの文化についてもあるのではないかと思う。質の点で問題のある出版物や

ドラマや音楽ばかりを、つぎつぎと「消費」していると、いつのまにか有毒色素みたいなものが精神のなかに蓄積して、人間として品のよくない人間になってしまう。それは短期間にはわからないが、成長期の子どもなどでは、思いがけない結果がでてくるかもしれない。

もし私たちが今のままで、このせっかちな生活をつづけていたら、十年、二十年さきにはずいぶんうすっぺらな文化ができてしまうだろう。ここいらで、どうすればもっとおちついて、丹念^{たん}な仕事ができるかをかんがえてみないといけない。

とくに大ぜいの人に製作物をまきちらしている人がおちつかないのはいけない。その人のおちつかない生き方が、国民全部に感染してしまう。新聞や週刊誌やテレビなどを事業としてやっている人に期待するのは、やすあがりに仕上げることばかりかんがえないでほしいということだ。

制作者たちがあわてないでいいように、十分の人間の数を用意してもらいたい。それが私たちの文化の質をささえることになるだろう。

(松田道雄「スピード時代」)

〈注〉親子のえんを切ること

問一 ☐ 部ア・イにあてはまるものを選びなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | 1 | そもそも | 2 | いささか | 3 | かえって | 4 | だんぜん |
| イ | 1 | 案の定 | 2 | 案外 | 3 | 全然 | 4 | 当然 |

問二 ☐ 部 a・b と同じ意味で用いられているものをそれぞれ選びなさい。

a 「けたがちがう」

- 1 自分とはけたがちがう考えをする人の意見もじゅうぶんに聞いて議論をしよう
- 2 店員さんがくれたおつりは五十円ほどけたがちがうので返しに行くことにした
- 3 このくつは私の足とは少しけたがちがうようではいると足がいたくなる
- 4 日本とはけたがちがうオーストラリアの大自然に私は圧倒されてしまった

b 「食うや食わず」

- 1 Aさんは食うや食わずの生活の中でも五人の子どもをりっぱに成人させた
- 2 Bさんは食うや食わずの節約でためたお金でごうかな自動車を買った
- 3 Cさんは忙しすぎて食うや食わずの状態が続きとうとう体をこわしてしまった
- 4 Dさんは日夜食うや食わずの努力を続けてみごと国家試験に合格した

問三 ☐ 部「このこと」とは何を指していますか。文章中の言葉を用いて書きなさい。

問四 ☐ 部 A・B 「ほんとうのタラコ」とありますが、A・B はそれぞれどのような「タラコ」を指していますか。文章中からぬき出しなさい。

問五 ☐ 部「これとおなじようなことが、私たちの文化についてもあるのではないかと思う」とありますが、筆者は具体的にどのようなことがあると言っていますか。文章中の言葉を用いて六十字以内で書きなさい。

問六 「スピード社会」についてのあなたの考えを良い点と悪い点の両方を挙げながら、百六十字以上、百八十字以内で書きなさい。

〔三〕 次のA、Cの各文と文の組み立てが同じものを、それぞれ後から選びなさい。

- A むこうの山の残雪が消え、田植えの季節がやって来た。
 B 背表紙にラベルがついている本は、図書館のものだ。
 C 公園の梅の花がとてもきれいにさいている。

- 1 私が最も尊敬している人物は父です。
- 2 電車のおくれのせいで私はちこくをしてしまった。
- 3 空はどんよりとくもり、時おり雪もちらついている。

〔四〕 次の――部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また、――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- | | | | | |
|-----------|----------|----------|------------|---------|
| 1
コウガク | 2
シタ | 3
クダ | 4
年がアラタ | 5
キチ |
| 心に燃える | をまく | がつまる | まる | に富む |
| 6
留め金 | 7
易しい | 8
直ちに | | |

ここは余白です。

11

二						
問十二	問十一	問九①	問六	問五	問四	問一
			1			
問十三		問九②	2			問二
			3			
		問十	4			問三
			5			
			6			
		問七				
	問八					

問 六										問 五			問 四	問 三	問 一															
													A		ア															
															イ															
															問 二															
															a															
															b															
																												B		

180

160

A
B
C

5	1
6	2
め金	
7	3
しい	
8	4
ちに	まる